

イアーゴの動機をめぐって

芳賀，敬治

<https://doi.org/10.15017/2332827>

出版情報：文学研究. 60, pp.127-142, 1961-03-20. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



イアーゴの動機をめぐって

芳賀敬治

中期の悲劇時代に達したシェイクスピアが、悪を深く掘り下げていったこと、そして、イアーゴが、シェイクスピアの創造した最高の悪役であることは、殆んどの批評家の等しく認めるところである。そして「オセロー」は、ベスルの指摘をまつまでもなく、単なる家庭悲劇たるにとどまらず、もっと大規模な、人生の根本問題を取扱ったものである。⁽¹⁾即ちそれは人間悪の問題であり、従って、この劇の興味の中心もイアーゴにある。そして最も問題になるのは、その悪の本質と、動機をめぐる種々相であらう。

従来の所謂伝統的イアーゴ観は、「無動機の悪意の動機探し」というコールリッジの説に始まる。ダウデンによれば、イアーゴは、悪そのものの問題として、シェイクスピアの脳裡に創り出された一つの形象であり、真の善行が、理由あつての善行ではないのと同様に、イアーゴの悪も、動機あつての悪ではなく、悪本来の傾向に根ざすものである。⁽³⁾

こうして、いわば、悪のために悪をなすといった、抽象化されたイアーゴは、当然、「心理的に不可能な存在ではないにしても、人間的存在ではなくなる。」としてブラッドレーの拒否するところとなる。しかし、彼も、イアーゴが、その行動の原因と

して挙げる理由を否認し、その独白において語る言葉をも信用しない。丁度子供が、訳もなく蛙を虐めて、その苦痛を楽しむ時のように、イアーゴも、相手に（まして憎む相手である）苦痛を与えることによって、阻まれた優越欲の満足を求めていると説き、更に一步を進めて、

「結局イアーゴは、単に活動家というだけではない。芸術家である。彼の行動は劇の筋、それもいりくんだ筋である。そしてこの筋を思いつき、仕上げていくところに、彼は、芸術的創造の緊張と欲びとを経験する。」

と云うとき、根本的にはコールリッジの云うところと同一線上にある。ただしコールリッジの真意は、ブラッドレー自ら断っているように、「イアーゴの悪は、彼自身の挙げる理由から生まれるのでもなく、又意識にあらわれる観念としての動機から発生するのでもない。」原因はイアーゴの性格そのものの中にある、というにあつたからである。

つまり、こうしたイアーゴ観は、イアーゴの悪が、普通の「動機」などというものでは説明のつかない、ずっと深いところに根を下しているという点に立脚するものであり、勢い、形而上学

的な解釈を下さざるを得ない。動機で説明がつかないとなれば、当然、イアーゴーを、人間的存在としては不自然である⁽³⁾とみなす立場が生じてくる。特に最近はこの傾向が強く、イアーゴーが演劇上の一つのタイプであるという見解が、屢々主張される。

この点をブラッドブルクはエリザベス朝悲劇の、演劇上の約束に裏附けを求め、次のように断定する。

「イアーゴーは明らかに悪党である。……悪党は悪党なのであって、何故そうなのかを問う必要はない。……その上彼はイタリヤ人である。従って彼が裏切者であり妬嫉心が強く、そして、マキアヴェリの流れをくむ者であることはいうまでもない。それに加えて、彼自ら、オセローやキャシオを嫉み、副官職を失ったことに怨を抱き、なおまた彼自身デズデモーナを愛している」と、釈明しようというのなら、彼の言葉は、そのまゝ額面通りに受取ってやらねばならぬ。なんとすれば、問題は全く以って、何故彼がそうしたいと思うかにあるのではなく、彼が如何に行動し、なにをしやべり、なにをなしとげるかという点にあるからである。」

更にファナーナムは、悪が深められ、その効力が増加するにつれて、遂には「悪が、中世の道德劇におけるような、登場人物としての形をとるようになる」ことを指摘し、イアーゴーは結局「ルネサンス期に生をうけた、中世劇のヴァイス（悪役）の後裔」であり、その「人を陥し入れる力がマキアヴェリ的なものに変じた」ものであると云う。そうなれば、動機はもはや問題ではない。イアーゴーは、オセローの悲劇を展開するために、ただ単に技術上の必要から起用されたものにすぎない。

ところで、イアーゴーが本質的にヴァイスであるという論証は、中橋一夫によって、充分の説得力を以ってなされている。彼の結論はこうである。

「オセローの世界の展開を示すためにはイアーゴーの悪行がどうしても必要だとシェイクスピアは考えたのだ。それで彼は古いヴァイスの型を基底においてイアーゴーを仕立てた。イアーゴーの動機の問題はそこに止まる。それ以上を探し求めることはシェイクスピアの関せざるところであらう。」

私も、イアーゴーが、ヴァイスの性格を多分に備えている、否、ヴァイスを基底にして創られたものであることを、全面的に肯定する者であるが、果してそれだけのものであらうか。形而上学的、或いはブラッドレー的解釈も行き過ぎなら、このつまり技術的な解釈も、片面の真実しか衝き得ていないと思われる。

そもそもイアーゴーなる人物は、これをシンシオの物語に取材した、シェイクスピア自身にとっても問題であったに違いない。シンシオの「邪悪な旗手」に、シェイクスピアはなにを見、かつなにを意図して、イアーゴーを創り上げたのであらうか。シェイクスピアは、「オセロー」に、キリスト教神話を寓したとさえみることにも出来る。これには相應の根拠もある⁽⁹⁾。なるほど、悪魔と結托して身を滅ぼすオセローは、まさしくファウストであるともいえるし、また、姿を偽って幸福な夫婦に破滅をもたらすイアーゴーは、実はセイタンであったのかもしれない。しかし、もし仮りにそうであったとしても、そのセイタンに如何にして人間的要素を織り込むかということが、シェイクスピアの問題であった筈である。

いかにもイアーゴーはヴァイス的存在である。或いはセネカ流の、また、マキバヴェリ流の悪党とも、セيطانとも呼び得よう。そうしたものの持つ悪のすべてをひっくるめて、一身に集めた存在である。しかし、ただ単にそれだけの問題ではない。

一体に、悪人なるものが明らかにそれと、観客の側にははっきりと示されていないが、他の登場人物からは、正直で親切な善人とみなされて、その正体が完全にかくされている場合、演劇としての恐らく最大の危険は、その人物が古くからの一つのタイプとしか感じられず、血の通った人間とはみなし難くなる点にある。しかもその危険を冒さない限り、人間性に根ざす悪を、根底からえぐり出すことは不可能であろう。シェクスピアは、敢てこの危険を冒した。彼がヴァイスを基底とした所以はここにあると私は考える。ドウヴァー・ウィルソンの言葉を借りるならば、「圧倒的な劇作衝動によって」シェイクスピアは、仮面の下にかくれた人間界にメスを加えようとしたのであり、「苦もんする魂の、のたうちまわるのを見て喜ぶ人間悪魔こそは、シェイクスピア自身の(10)一身分」であつたかもしれない。さればイアーゴーは、社会の内面にひそむ人間悪の受肉者でもある。シェクスピアの技術上の問題は、むしろ、いかにしてイアーゴーに人間性を与えるかということであつた。悪の力が強まれば、人物はタイプ化する。しかし、単なるタイプや抽象的存在に終つたのでは、観客に訴える力は弱まる。ヴァイスであると同時に人間であらねばならぬ。そのためシェイクスピアは、イアーゴーに動機を与えた。しかも、ありたきりの平凡な悪党に墮すことのないように、複雑な与え方をした。果していかなる動機を、いかにして与えたか、そしてい

かに人間的要素を加えていったかを、ここにたどってみようと思ふ。

開幕第一場、まずイアーゴーがどういう種類の人物であるかを独白によらず、ロダリーゴーとの対話によって観客に印象づけたことにも、シェイクスピアの意図がうかがえるが、とにかくイアーゴーの不満は、彼の実戦上の手腕や経歴を顧慮せず、「町のお偉方」の支持をも無視して、オセローが、キャシオ如き青二才を副官に任命したというのである。しかし、ブラッドレーの指摘する通り、キャシオが副官に選ばれた事実以外には、なにも信用できない。ただ、一つ補うならば、イアーゴーが、副官の地位にある程度の望みをかけていたのであることは、一応考えられる。そうとすれば、その希望がもっともなものであつたかどうか、或いはオセローの選択が、客観的妥当性を欠くものであつたかどうかが問題となるが、イアーゴーに有利な確証はなにもない。第一、このことを口にするのはイアーゴーだけであつて、彼の失意を推し測る者は誰もない。彼に対するキャシオの態度にも、わだかまりは全く見られないし、また、妻のエミリアでさえ、キャシオが失脚した時、その復帰に、喜んで手を貸そうとしている。ただ結局キャシオの後任には、イアーゴーが納まりはした。しかしこれを以て、オセローがイアーゴーにも、副官としての適性を認めていたと判断するのは誤りであろう。任命の時と場合を考えれば、むしろその逆である。嫉妬に狂い、キャシオ殺害を命ずるに至つたオセローが、イアーゴーの絶大な協力に、副官職を以て報いたまでである。それも任命の瞬間まで、オセローの考えに

は入っていなかったことであり、少くとも当初の彼は、キャッシュの復讐をこそ考えていた形跡がある(三幕一場四八―五一)。結局イアーゴの不満は、極く一般の誰しもが、同輩に先を越されたような場合に経験する種類のものにすぎない。

I know my price, I am worth no worse a place.

「俺のねうちは俺にわかつている。それくらいいのねうちはあるんだ。」

(一幕一場二)⁽¹²⁾

とは、そうした場合の一種典型的な言い草である。動機の真偽はともかく、これを語ることによって、あまりにも人間的な卑小さをあらわしてはいまいか。そしてここで注目を引くのは、オセロに対する憎しみの言葉が再三繰返されることである。

RODERIGO: Thou told'st me, thou didst hold him
in thy hate.

IAGO: Despise me if I do not:

ロダリーゴ「君はあいづを憎んでいると云ったじゃないか。」

イアーゴ「憎まんでおられるか、てんだ。」

(一幕一場七―八)

now sir, be judge yourself,

Whether I in any just term am affin'd

To love the Moor.

「まあさ考えてもみるがいい。何んの義理があつて俺がムーアに忠義立てをせにやならんのか。」

(一幕一場三八―四〇)

Though I do hate him, as I do hell's pains,
Yet, for necessity of present life,

I must show out a flag, and sign of love,
Which is indeed but sign.

「地獄の責苦ほどに憎い野郎だが、今のところはやむを得ん。忠義の旗じるしをかざしておかにならん。実は看板だけの話だな。」

(一幕一場一五四―一五七)

I have told thee often, and I tell thee again, and
again, I hate the Moor; my cause is hearted,

「何度も云つたらうが。何度だって繰り返してやる。俺はムーアが憎い。この怨みが忘れられるものか。」

(一幕三場三六四―三六六)

ムーアが憎い、我慢ならぬという言葉は、更に独白においても繰り返される。(一幕一場三八・二幕一場二八三)⁽¹³⁾。この憎しみ―これをしも単なる見せかけと疑うことはできない。一つのテーマを提供するかの感すらある。そしてキャッシュの問題は、その原因というよりも、憎悪の言葉を吐き出させるきっかけにすぎないのであって、その前からすでに抱いていた敵意の根強さをこそ印象づけるものである。発作的に燃え上るのではなく、沈潜した憎悪―しかしこれだけで以って、イアーゴの言動を説明し尽すことは出来ない。当然、イアーゴには、ロダリーゴにも明かさなかった、もっと深い怨みがあったのである。それは、彼の第一独白にまずあらわれる。

ところで、ロダリーゴの持つ役割の重要性は、屢々指摘され

る通りである。自己をかくす卓越した能力の持主が、この「ヴェニスの屑犬」にだけは、始めからその正体を覗かせている。しかもこれが、シンシオにはあらわれない、シェイクスピアの独創による人物であってみれば、それだけ意味も大きい。単にイアーゴをヴァイスに仕立てるだけならば、ロダリーゴを必ずしも必要とはしなかったであろう。また、オセローという偉大な犠牲者の対照的存在、乃至はキャシオの対抗馬的存在たらしめるだけならば、イアーゴは他の人物に対すると同様に、自己の姿を偽り通せたであろう。シェイクスピアが特にこの人物を起用した、最も重要な目的は、イアーゴに動機を語らせること自体にあったのではなく、そうすることによって人間性を附加することであった。とまれイアーゴは、ロダリーゴにすべてを語ったわけではない。彼の独白をきこう。

I hate the Moor,

And it is thought abroad, that 'twixt my sheets

He's done my office; I know not if't be true...

Yet I, for mere suspicion in that kind,

Will do, as if for surety :

「俺はムーアが憎い。それに奴は俺のふとんにもぐり込んで、俺の代理を勤めやがったという話もある。真偽のほどは知らんが、そんな疑いがある以上、実際にやったもんとして仕返しをしてやるんだ。」

(一幕三場三八四—三八八)

しかし勿論、この独白がそのまま信じられるほど単純なイアーゴではない。まず、そういう噂があったとしても、それが事実

無根であることははっきりしている。

尤もエリザベス朝にあっては、妻の不義に対する夫の復讐は、オセローの言葉にもある通り「正義」とみなされていた。それだけではない。妻に間男をされた間抜けの夫は、世間の軽蔑をかい、嘲笑の的となった。従って、夫にとっては、たとえ事実無根の風評といえども、事実同然の重みを持ったであろうことは想像に難くない。ドレイパーはこの点に立脚して、イアーゴに充分の動機を認め、彼をあまりにも人間的なルネサンス人であると解釈する。

しかしこの解釈は、イアーゴが妻の不義を事実と信じている場合にのみ成り立つ。でなければ、この噂も一つのきっかけで、真の動機はもっと別なところにあるとみななければなるまい。ドレイパーは、エミリアの言葉を以って反論するのであるが――

EMILIA : O, fie upon him, Some such squire he was,

That turn'd your wit, the seamy side without,

And made you to suspect me with the Moor.

IAGO : You are a fool, go to.

エミリア「ええい何んて奴だらう。そういう奴がやったんだよ。いつかあなたの分別をひっくり返して、わたしがムーア様と怪しいなんてそそのかしたりね。」
イアーゴ「ばかな。何に云う。」

(四幕二場一四七一—一五〇)

あらぬ噂を立てる人間に対するエミリアの怒り、かりそめにもそれを本気にしたことがある、などという愚かさを自嘲するかのイアーゴの打ち消し――このやりとりは、イアーゴの疑いが晴れ

ていることを示す。そうでなければ、彼の憎悪は、まずエミリアにも向けられる筈である。そもそも彼は、オセローの單純さ、騙され易い間抜けさを度々嘲笑しており、その「おおまかな、開けっぴろげの性質」にこそ目をつけたのであって、そのオセローがひそかに不義を働いたと、本気で疑う筈もない。

それにも拘らず、この疑いが、第二独白で再び、しかももっと強い語調で彼の口にのぼる。そして、新たな別の動機も加えられる。イアー・ゴーにおける独白の複雑さは、そのまま、人間イアー・ゴーの複雑さであり、シェイクスピアの手腕の見せどころでもあるが、イアー・ゴー解釈の、最も重要な鍵は、この第二独白に秘められているのではなからうか。

That Cassio loves her, I do well believe it ;

That she loves him, 'tis apt and of great credit :

The Moor, howbeit that I endure him not,

Is of a constant, noble, loving nature ;

And I dare think, he'll prove to Desdemona

A most dear husband : now I do love her too,

Not out of absolute lust, (though peradventure

I stand accountant for as great a sin)

But partly led to diet my revenge,

For that I do suspect the lustful Moor

Hath leap'd into my sheet, the thought whereof

Doth like a poisonous mineral gnaw my inwards,

And nothing can, nor shall content my soul,

Till I am even with him, wife, for wife :

「キャッシュがあの女に惚れてることはまず間違いない。女の方があいつに惚れてることも、ありそうだったし、充分信じていい。ムーアの奴、俺にや我慢ならんが、節操の堅い、情の深い高潔な男だ。デズデモーナにしてみりゃ、大いに立派な亭主だろうで。ところで俺もあの女に惚れている。といって情欲からばかりじゃない——もっとも、そりゃ、それくらいのお互に根性がないじゃないが——半分は仕返しをしてやりたいからだ。なにしろあの淫乱のムーアめ、俺の寢床にとびこみやがったくさい。そいつを考えると、毒藥で腹ん中がひっかきまわされるようだ。女房取られりゃ、こっちもやってやる。どうでもこうでも、あいつと五分五分のあいこといかなきゃ、腹の虫がおさまらん。」

(二幕一場二八一—二九四)

キャッシュとデズデモーナとの相愛関係、これは明らかにイアー・ゴーのこじつけである。

では、イアー・ゴーがデズデモーナを愛している。というのはどうであろうか。シンシオにあつては、この恋が無視されて憎悪と変じ、これが大きな動機となった。その名残りをシェイクスピアは不用意につけ足したのであるうか。愛とか情欲とか、そのような人間臭い要素はイアー・ゴーには皆無であるとグランヴィル・バーカーは云う。⁽¹⁶⁾「俺も愛している」——確かにこの言葉は、一顧の価値もないかみえる。ひょっこり出て来た思いつき(イアー・ゴーには珍しいことではない)か、せいぜい悪みざけといったほどの印象しか与えない。

しかしこれが、実は、イアー・ゴーの思わすもらした本音であ

るとしたらどうであろうか。そもそも、ブラッドレー一派の誤りは、イアーゴーがロダリーゴーに語る言葉を信用することはあつても、独白となると全然信用しない点にあるのではあるまいか。独白は一応信用してみる―私はここから出発した。

さてイアーゴーは、愛する理由をつけ加えて「仕返しをしてやりたいためだ」という。だが、さきに考察したように、イアーゴーの本心は、オセローの不義を疑つてはいないとすれば、その「仕返し」という理由は、実は全く成立しないわけである。勿論、理由にならぬ理由をイアーゴーが述べても何等奇異とするに足りぬが、それならなおさら、「情慾からではない」という打消しが、心ひそかな肯定であるかもしれない。「それくらいの助平根性がないじゃない」とも云っている。ほんとうはここに、即ち情欲の方に原因があつたのではなからうか。「愛」という言葉の内容は、どあいまいなものはない。イアーゴーはイアーゴーなりに、愛をもっと正しくは肉体的魅力を、デズデモーナに感じていたのではあるまいか。満たされない、抑圧された欲望が彼の中にうごめいていたのではないか。もしそうだとすれば、オセローとエミーリアの仲を故意に疑おうとする気持も納得できるし、「仕返し」の対象にエミーリアが入っていないのも当然である。けだし、自らの邪心を正当化するために、それに類似した悪徳を他人にかぶせるのは、極めて普通に見られる心理現象である。相手の悪事を想像し、これを信じこむことによって、自らは自由な行動範囲を得るのである。

イアーゴーのオセローに対する憎悪はずっと以前からのものである。これが、きっかけのある毎に強まり、更に性的嫉妬が加

わるに及んで、彼の行動の原動力となるほどにまで発展したのではなからうか。ブラッドレーは、「俺も愛している」という言葉の、前にも後にも、露ほども、それを示すような言動はないと云うが、果してそうであろうか。私の仮定が正しければ、やはりどこかにそれがあらわれていなくてはならぬ。第二独白の分析を更に進める前に、もう一度、ここに至るまでのイアーゴーの言動をたどってみよう。

開幕の場で、イアーゴーがまず託つのは、自分の地位に関することであつた。しかし奇妙なことに、その直後におこした行動は、オセローとデズデモーナとの間に一悶着起させることであつた。しかも、そうしたところで、二人の仲を割くことも、オセローを失脚させることも出来ない、出来る筈もないと、彼ははっきりと見透していたのである。

Even now, very now, an old black ram

Is tupping your white ewe;

「現に今、今も今、黒ん坊の老いばれ雄羊が、お宅の白い雌羊に乗つてるところなんですぜ。」

(一幕一場八八―八九)

……you'll have your daughter cover'd with a Barbary horse;

「お嬢さんの上に、アフリカ馬を乗っからせようてんですか。」

(一幕一場二〇―二一)

……your daughter, and the Moor, are now making the beast with two backs.

「お嬢さんとムーアが、背中二つのけだものを演じてる最中

ですと……」 (二幕一場一一五——一七)

等々、ブラバンシオをたたき起してあびせかけるイアーゴの言葉——オセローの愛の交わりに寄せるイメジの毒々しさ——これが単に、ブラバンシオを怒らせるための技巧というにすぎぬであらうか。イアーゴの習性的言葉使いというには、あまりに生々しいこのイメジは、やはり彼の、阻まれた情欲がえがくものではなかったか。

そのイアーゴが、デズモーナを護衛してサイプラス島に渡る。その浜辺でオセローの到着を待つ間、キャッシュとデズデモーナの親しげな所作に目をつけたイアーゴの傍白——

He takes her by the palm ; ay, well said, whisper :

... Ay, smile upon her, do :

good, well kiss'd, an excellent courtesy : 'tis so indeed : yet again, your fingers at your lips? would they were clyster-pipes for your sake...

「あいつ手を握ったな。そう、上出来だ。ヒソヒソやるがいい。……………そう、にやにやしな、せいぜい。……………お見事。接吻ぶりがいいや。大した作法じゃのう。そうそう、その通り。へえ——またか。指を唇にね。手前にゃそいつが灌腸器だったらお似合いだな——」

(二幕一場一六七——一七七)

これはもはや、地位上のライバルに対する憎しみを越えたものである。船中での彼の気持の抑圧がいかなるものであったかを思わせるほどである。キャッシュの所作が儀礼的なものにすぎないことをイアーゴは勿論知っている。しかしこの「女たらし」がデズデ

モーナと少くとも自分より親しい間柄にあるのを見せつけられては、腹の虫もおさまりかねたであらう。

このキャッシュに対する忿懣は、この直後、ロダリーゴに働きかける時にも、どこまでもところを知らぬかの勢いである。

...a knave very voluble, no farther conscionable than in putting on the mere form of civil and humane seeming, for the better compassing of his salt and hidden affections :, Besides, the knave is handsome, young, and hath all those requisites in him that folly and green minds look after ; a pestilent complete knave, ...

「へちのペラペラ廻る奴でな。良心のリー○の字もない野郎ときている。いやらしい欲情をとげるためにゃ、上品めかした、親切たらしい体裁だけ作ってりゃ、それでいいって料見なんだからな。……………その上、野郎男前はよし、若くもある。世間知らずの浮気娘がほしがるものは、みんな持っている。完全無欠の極悪人たゝ奴のことさ。」

(二幕一場三六一——三四五)

そこで思いついたのが、デズデモーナのキャッシュへの愛であつた。

...the woman has found him already.

「あの女は、もうあいつに目をつけたんだ。」

(二幕一場三四五——三四六)

ロダリーゴの説得の言葉としては妙な具合である。彼には、デズデモーナ獲得の希望をつながせておく必要があった筈である。

そこにキャッシュオが介入してくれば、ロダリーゴーには、それだけ分が悪くなる。尤もここでは、彼に、キャッシュオに対する敵愾心を植えつけることが急務ではあった。しかしそのためならば、イアゴーがこの「うすのろ」をやつるのに、他にいくらかも手段があったであらう。たとえキャッシュオを失脚せしめたところで、それがロダリーゴーに、なにを約束するものでもない。イアゴーには、浜辺での光景がこびりついていたのである。

IAGO : ... Didst thou not see her paddle with the palm of his hand?

RODERIGO : Yes, but that was but courtesy.

IAGO : Lechery, by this hand : an index and prologue to the history of lust and foul thoughts : they met so near with their lips, that their breaths embrac'd together. When these mutualities so marshal the way, hard at hand comes the main exercise, the incorporate conclusion.

イアゴー「彼女があいつの手のひらを、いじりまわしているのを見なかったかい。」

ロダリーゴー「ああ見たよ。けどあれは、ただの挨拶だよ。」

イアゴー「助平根性さ。きまってるあ。これから始まる濡れ事、色事の幕開き、いやさ前口上さ。唇をあんなにそばまでくっつけて、息と息とが抱き合ってたろうが。ああいういちゃつきが進行すると、すぐあとは本チャンと来る。とうとうくっつきました、てなことにな。」

これがデズデモーナの真実を語っているのではないことを、イアゴーは知っている。ロダリーゴーにたきつけるというよりも、イアゴー自身が、我と我が身に、信じこませようとしているのではないか。半ばかくされた本能的衝動が、このように、ロダリーゴー説得には必要以上のものを、吐き出させる結果になったのではなかるうか。

こうしてさきの第二独白となる。

まず、キャッシュオとデズデモーナの関係を確実なものとして思いこもうとする。そこでひょっこり出て来た言葉が「ところで俺もあの女を愛している」——これはやはり、動機探しの悪意がとってつけたものではなかった。彼の本音である。

デズデモーナがオセロー以外の男に、心を許す筈のないことをイアゴーは知っている。それにオセローの、夫としての資格も認めざるを得ない。結局イアゴーには望み得べくもない女性であった。さればこそ永久に満たされるすべもない情欲、これが、イアゴーの行動の、大きな推進力ではなかったか。しかしイアゴーは、自分自身に対して、これを忘れる必要がある。なんとすれば、「節操の堅い」「高潔な男」と、彼もひそかに認めているオセローを、どこまでもけしからぬ男にしておかねばならぬからである。オセローの不正、不義の、自分こそは被害者であらねばならぬ。だからこそ仕返しをしてやるのである。その自分の道ならぬ欲求が、復讐の動機に加えられたのでは、それこそすじが通らない。

思わず表面に出てしまった本音を、しかしイアゴーは、いき

なり打ち消す不自然は冒さなかった。連想的に、除々に焦点をずらしていき、結局は、自分の思うつばへともっていく。独白が、イアーゴーにあっては、独特な使い方をされているとみなければなるまい。

「俺も愛している」と云ってしまった時には、彼はもう、本能的に足場を変えにかかっている。「情欲からばかりじゃない」と一応ずらしておいて、「仕返しをしてやりたいからだ」と、注意的をすりかえてしまう。そこで、オセローの不義を、確実なことにしておかねばならぬ。一步も譲歩はならぬ。第一独白での「真偽のほどは知らんが」などといった、なまぬるいことは云っておれぬ。だからこそ、彼の受けた苦痛は、「毒薬で腹中をひっかきまわされる」ほどのものとなる。こうまで痛めつけられては仕返しをせざるを得ないのも、ものの道理というものである。イアーゴーの心理の動きに不自然はない。独白は続く。

Or failing so, yet that I put the Moor,

At least, into a jealousy so strong,

That judgement cannot cure;.....

「それが出来なきゃ、せめてムーアめに、思慮分別じゃどうにもならんほどの、猛烈な嫉妬を起させてやる。」

(二幕一場二九五―二九七)

デズデモナをわがものにしよう。即ちそうすることによって仕返しをしようという計画は、はじめから立てていない。立てても無駄だと知っている。ではなおさらオセローが憎い。オセローの嫉妬心をかきたてるイアーゴーの企画の焦点はここにある。こうしてイアーゴーは、なお、その具体策を思いめぐらす。ま

ずはロダリーゴーを使ってキャシオをとつちめることにする。オセローについて憎い男はキャシオであるから、イアーゴーには、そうするだけの理由がある。否、もう一つつけ加えておく方がいい。

For I fear Cassio with my night-cap too

「何にしろ、キャシオの奴も、俺のナイト・キャブをかぶりやがったくさいからな。」

(二幕一場三〇二)

この疑いは、オセローにかけた疑いよりも、なお根拠は薄い。いかにもとってつけたこの台詞は、イアーゴー自身にも、さほどの切実感に伴わなかったであろう。しかし、オセローに対すると同様の当然といえば当然の心理作用であった。

続いてイアーゴーは、自分の計画が凱歌を奏すれば、気も狂わんばかりにのたうちまわるであろうオセローの未来像を脳裡にうかべ、しかもそのオセローに、「恩を売り、礼を云わせ」ようという、イアーゴー得意満面の図を描いて、この独白を終る。

意識の焦点は完全に移された。「俺も愛している」という言葉の真実性を疑い、否定する者があれば、それこそまさに、イアーゴーの思うつばであつたろう。つい意識にのぼった自分の本音、自らそれと認めたくない自分の邪心、これを、精妙なまでの狡猾さを以て意識の下にとじこめておこうとする、人間心理の意識下の流れを、シェイクスピアは正確にとらえて、イアーゴーの独白に独特の機能を与えたと云うべきであろう。イアーゴーの列挙する動機そのものは、信頼性の極めて乏しいものであつても、イアーゴーにとっては、自分の心理をそのまま忠実に独白していた

のである。

こうしてイアーゴーは、無意識のうちにも、自分の本音を認めまいとした。あとは計画を一步步効果的に押し進めていくだけである。しかしやはり、デズデモーナへの性的執着は消しようもなく、彼の中には、常に彼女の裸身が横たわっていた。ということは、今の分析を裏づけるものであろう。

サイプラスでの最初の夜、オセロー夫妻の寝室に退くのを見送ったイアーゴーが、二人の寝間の営みに寄せる異常なまでの関心——熱のない申し訳的なキャッシュオの受け答えも耳に入らぬかに、イアーゴーは能弁をふるう。

“……he hath not yet made wanton the night with her; and she is sport for jove.”

“And I'll warrant her full of game.”

“What an eye she has! methinks it sounds a parley of provocation.”

“...when she speaks, 'tis an alarm to love.”

“Well, happiness to their sheets!……”

「將軍はまだ、一晩もしっぽり楽しんじやないんですからな。それに彼女ときちや、ゼウスの神も手を出しそうな逸物ですぞ。」

「それに彼女、まちがいなく手管にたけてますぞ。」

「どうです、あの眼は。男の心をかきたてずにはおきませんな。」

「彼女の話しっぷりときては、恋心をよびさますにはおれちせんやね。」

「まずまず、お二人のお床入り、めでたしめでたし。」

(二幕三場一五—二六)

等々、美しい新妻の讚美にしては、慣習的なものがあるにしても、いささか常軌をはずれている。そして更に、キャッシュオ、モンターノ—事件があつて、その事情の説明にまわったイアーゴーが、両者の仲を表現して、

……like bride and groom,

Devesting them to bed...

「これくらいいよいよ床入りをしようという、新郎新婦のように……」 (二幕三場一七一—一七二)

仲睦まじくしていたのに——という異様な比喩も、今しがた床入りしたばかりのオセロー夫婦の姿が、まだイメジに残っていたことを示すものであろう。

キャッシュオ失脚となり、その「運の立て直し」をデズデモーナに頼みこませるよう、まず工作して、いよいよイアーゴーは、直接オセロー攻略にむかう。「デズデモーナがキャッシュオを呼びもどしたがるのは、実は肉体の欲情のせいです」(二幕三場三四八)とつきこんでやろう—というイアーゴーの手筈には、すでに露骨なイメジが宿っている。従つて、「嫉妬に御用心なさいまし」(三幕三場一六九以下)と、その苦しみ、惨めさを説くイアーゴーの言葉は、彼自らの実感を伴つて、二重に意味を持つてくる。そして、この場を通じて行なわれる、デズデモーナ攻撃のはげしさ—

Ay, there's the point: as, to be bold with you,

Not to affect many proposed matches,

Of her own clime, complexion, and degree,

Whereto we see all things nature tends ;
Fie, we may smell in such a will most rank,
Foul disproportion ; thoughts unnatural.

But pardon me :

「そう、そこなでございますよ。たとえば、遠慮なく申します、お国も同じ、顔の色も同じ、家柄もつりあった申込みが、いくつもありましたのに、それを見向きもなさらないで、どうみても、そっちになびくのが当り前でしょうに、ですな。ふん、どうもくさい。みだらな思いがありそう。むかつくような不釣合ですし、不自然な考え方ですしな。いや、ごめんなさいまし……………」

(三幕三場 三三—三三八)

冷静な計算に基づいて出発した中傷ではあったが、ここまでくれば、イアーゴー自身の、満たされない情欲の、恨み言というに近い。これがオセローの急所を突くと同時に、イアーゴーの本能も溜飲を下げたことであろう。たちまち嫉妬のとりことなったオセローは苦悩を一挙に解決しようとする。イアーゴーを糾明し、証拠の明示を迫る。オセローも必死なら、イアーゴーも、一步誤れば命がない。思わぬ土壇場に立たされたイアーゴーの、オセロー攻略の捲き返しは、又しても毒々しい、鄙猥なイメージにぬりこめられる。

Would you the supervisor, grossly gape on,

Behold her topp'd?

「現場に行つて、あんぐり口をあいて奥様の乗っかられてるところを、ごらんになろうとおっしゃるのですか。」

(三幕三場四〇—四〇二)

—それはできない相談というもの—
Were they as prime as goats, as hot as monkeys,
As salt as wolves, in pride ;

「よしんば二人が、山羊のやうにまっさかりで、猿のやうにかつかた燃えて、さかりのついた狼みたいに淫乱だとしても……………」

(三幕三場四〇九—四一〇)

こうしてイアーゴーは、再び自己のベースにオセローをのせてしまふ。そして思いついたのがキャッシュの夢

And then, sir, would he gripe and wring my hand,
……………and then kiss me hard,

……………then laid his leg

Over my thigh, and sigh'd, and kiss'd, and then

Cried "Cursed fate, that gave thee to the Moor,"

「それからあなた、私の手を握ってぎゅっとしめつけ……………そしてきつい接吻……………そうしといて脚を私の股にのせて、ためいきついて、又接吻して、そして大きな声『何んてのろわれた運命だ、お前をムーアにやったなんて！』」

(三幕三場四二七—四三二)

まるでイアーゴーは、キャッシュを身代りに、自らの肉体的満足をもさばっているかの如くである。「お前をムーアにやったなんて」とはイアーゴー自身ののろいではなかったか。

とにかくここで、キャッシュとデズデモーナを決定的に結びつけることに成功した。しかもなお、イアーゴーの駄目押しは続く。

Or to be naked with her friend abed.

An hour, or more, not meaning any harm?

「じゃ一時間もそれ以上も、仲のいい男と裸で寝るてのは？
ただしみだらな気持なぞなくてですよ。」

(四幕一場三一四)

OTHELLO : But what?

IAGO : Lie.

OTHELLO : With her?

IAGO : With her, on her, what you will.

オセロー「な、なんだと？」

イアーゴ「寝た、と」

オセロー「あれとか？」

イアーゴ「御一緒か、乗ったか、まあそこはおよろしく。」
(四幕一場三三三、三四)

オセローは遂に腹をきめる。そして毒薬の入手を命ずる。イアーゴはもう一度最後に、ベッドに横たわったデズデモーナを脳裡に浮かべる。

.....strangle her in her bed, even the bed she
hath contaminated

「寝床で首をおしめなさいまし。奥様がけがした、その寝床
で。」
(四幕一場二〇三—二〇四)

ここに、イアーゴの動機の微妙複雑な凝結を見る。夫婦の営みの行なわれるその場で、二人の愛の決定的破壊が、しかも自らの手によってもたらされる——イアーゴにとって、これ以上の満足があるうか。イアーゴの云う「奥様がけがしたその寝床」は、二重の意味、二重の効果をもつ。即ち、この言葉によって、

オセローは、自分の為そうとしている行為が「正義」であるという幻覚を抱く（「よしよし、正義の下す罰じゃ、氣に入った」——四幕一場二〇五）。しかし、イアーゴにとって、デズデモーナが寝床をけがしたとは、彼女が、オセローを夫に選んだことに他ならぬ。イアーゴもまた、彼女に罰を加えているのである。

以上のようにみれば、イアーゴには、明かに動機がある。性的嫉妬——それも、自らの尊厳を傷つけられたからではなく、始めから満たされない運命にある抑圧された情欲がゆがめられたもの——それが、オセローに対する一種本能的な憎悪をますます根強いものとする。ただ、一見、いかなる意味にもせよ、愛という人間的要素がイアーゴの内部と無関係に思えるのは、彼自身が軽蔑する人間の本能を自らの中には認めなかったからである。そして、肉体的にも精神的にも、彼とデズデモーナとは、相接することのない別の世界の住人であることを知っていた。そこで彼の情欲は、彼女の選ぶ相手に対する憎悪となって沈潜する。デズデモーナが、やがてはオセローに飽き、別の恋人をほしがるようになる——と、イアーゴは再三ロダリーゴに云う。これは、ロダリーゴの説得の方便ではあった。しかしイアーゴ自身もそう信じたかった。彼女の選んだ相手の、苦惱、失望、怒り、幸福の破壊を願うイアーゴ自身の声でもあった。ブラバンシオを挑発したのもその願いのあらわれであった。そして、同時にデズデモーナをも、自分の手にとどかぬ高貴な存在としてではなく、みさげはた肉欲の塊として脳裡においておかなくては満足できなかった。ロダリーゴに言う

.....if thou canst cuckold him, thou dost thyself a pleasure, and me a sport.

「もしお前が奴の女房を寝取ることが出来りゃ、お前にとっちゃお楽しみ、俺にゃお慰みってことよ。」

(一幕三場三六八—三六九)

もその一端を示す。即ちイアーゴの性的嫉妬にはまた、一種の劣等意識がかくされていることも見逃せない。これは、キャッシュオ闊討ちに当って

.....if Cassio do remain.

He has a daily beauty in his life

That makes me ugly :

「もしキャッシュオが生き残るようなら、こいつは平常が立派に光りやがるから、いかにも俺が、見栄えがしなくなる。」

(五幕一場一八—二〇)

という言葉によっても明かである。

しかし、イアーゴは、他を愚か者扱いにすることによって、自己の劣等感を知的優越感に変えてしまう。彼はロダリーゴに侮りをこめて(ただしロダリーゴはこれに気づかない)、「くだらん男でも恋をすりゃ、生まれつきより高尚になるっていうからな」(二幕一場二四—二六)と云うが、いみじくもいったものである。その言葉の真実を知らぬではないが、その可能性を彼は決して信じてはいない。彼にとって、人間は、性欲と愚かさの結合体である。そして、そういう人間界にあって、彼の優越感を支えていたものは彼の理性である。彼がロダリーゴに、人間の意志の力を説き、かつ

If the balance of our lives had not one scale of reason, to poise another of sensuality, the blood and baseness of our natures would conduct us to most preposterous conclusions. But we have reason to cool our raging motions, our carnal stings, our unbitted lusts ;

「もし、われわれ人間が生きていくのにだね、その天秤の片方に色気の皿ばかりで、理性ってもんがもう片方の皿でつりあいをとってくれなきゃ、人間本来いやらしい欲情のかたまりなんだから、およそこんでもないことになっちゃう。けれどまだ、理性ってものがあって、燃え上る情欲も、肉欲も淫欲もみんな冷してくれるんだ。」

(一幕三場三二六—三三二)

というとき、これは所謂、悪魔が聖書を引用するの類ではあっても、実はイアーゴが最も価値を認めている理性の機能を讃美しているのである。

ただし彼の行動は、およそこの言葉とは逆である。ロダリーゴの欲望を理性で抑えるようにしむけているのでは決してない。彼が少しでも理性をとりもどしかけようものなら、その片端から足をすくう。ブラバンシオに対してもそうである。結局彼の理性を奪い、自己を失わしめて、イアーゴの思うままに動かしてしまふ。イアーゴ自身についても、理性は欲情を抑えるのではなく、彼の場合は逆に、欲情のあやつる道具である。例えば、彼が、オセローとエミリアの仲を疑う時も、彼の理性は、それを打ち消すでも、真偽を確かめようとするのではない。逆に、そ

の疑いを事実とみなし、憎悪を強め、そしてその感情を行動にまで発展させる。この理性が、結局は、イアーゴーをしてあのような行動にまで押し進めさせたともいえる。

重ねて云う。イアーゴーには動機があった。しかしこれは、あくまで、彼に人間性を持たせるためにシァイクスピアがとった手段であった。従って、イアーゴーには、その動機が些細なものであるうと、決定的なものであらうと、実は問題ではなかった。彼の性的嫉妬は、本当の欲情に根ざすものであってもよし、或いは無能力者のゆがんだ嫉妬であってもいい。彼が、デスデモーナによって、性的欲情を刺戟されようとなれまいと、いずれにしても彼は恐らく、同じように筋を運んでいったことであらう。彼が本質的にはヴァイスたる所以である。然らば、イアーゴーの動機というのは、真の意味の動機とは云えないかもしれぬ。やはり、「無動機」という言葉がイアーゴーには最も適したものであるかもしれない。しかし、いかにそうであってもイアーゴーの性格上の諸要素を無視することは出来ない。シェイクスピアが、根本的にはヴァイスをかたどりながら、従って、動機の有無がイアーゴーのもたらず結末を左右するものではないにも拘らず、しかもなお動機を与えた点を私は指摘したいのである。

オセローについては、ここで触れる余裕がないので別の機会に譲るが、要するに彼の悲劇は、イアーゴーなくしては起り得なかったことは確かであらう。それにも拘らずシェイクスピアは、オセローに弱点を与えることを忘れなかった。つまり、イアーゴーの悪が勝利をおさめるのは、その犠牲となる対称のそれ自体に、彼の悪を受け入れる態勢、乃至は隙のある時であって、シェイクス

ピアは、善なるものすべてを陥し入れる絶対的力を持った悪としてイアーゴーを創造したのではなかった。(現実の社会において、隙のない人間は無い、という一般の真実は別問題である。)イアーゴーも人間である。ヴァイスであると同時に人間である。劇的效果を一層深めるために、抽象的悪を具体化し、ヴァイスを人間的存在たらしめ、しかもなお、平凡な悪党と化せしめなかったところにシェイクスピアの偉大さがある。

註

- (1) S.L.Bethell: "Shakespeare's Imagery: The Diabolic Images in *Othello*" (Shakespeare Survey Vol. 5, 1952)
- (2) S.T.Coleridge: *Lectures on Shakespeare* 1856
- (3) E.Dowden: *Shakespeare: His Mind and Art*
- (4) A.C.Bradley: *Shakespearean Tragedy* 1904
- (5) J.M.Stewart: *Character and Motive in Shakespeare* 1949
- (6) M.C.Bradbrook: *Themes and Conventions of Elizabethan Tragedy* 1935
- (7) W.Farnham: *Shakespeare's Tragic Profler* 1950
- (8) 中橋一夫「道化の宿命'シェイクスピアの文学」一九四八
- (9) P.N.Siegel: "The Damnation of *Othello*" (PMLA, LXVIII 1953)
- (10) J.Dover Wilson: *The Essential Shakespeare* 1932
- (11) G.L.Kittredge (ed.): *Othello* 1941
- (12) 「オセロー」からの引用章句はすべて

M.R.Ridley(ed.) : Othello (The Arden Shakespeare)
1958 による。

(13) 私の知る限りでは、原因はともかく、イアーゴーのオセロー
に対する憎悪を否定する批評家はないうちである。

(14) J.W.Draper : "Honest Iago" (PMLA XLVI) 1981

(15) マーベラーはなおインスマンの A Woman Killed With
Kindness を例証にもっているが、この場合とても、妻の
不義は事実であり、夫はその現場を確かめるのである。

(16) H.Granville-Barker : Prefaces to Shakespeare